

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370841

研究課題名(和文) 儒教的理念にもとづく「近代」国家の模索：大韓帝国の統治構造と朝鮮社会

研究課題名(英文) A Trial of "Modern" State based on the Confucian idea: Governing Structure of the Korean Empire and the Korean society

研究代表者

小川原 宏幸 (OGAWARA, Hiroyuki)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：10609465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：1897年に成立し、1910年の韓国併合によって滅亡させられた大韓帝国がいったいどのような統治構造をもつ国家であったかというのは、朝鮮近代史のみならず日朝関係史でも重要な課題である。大韓帝国に対する現在の歴史的評価は、日韓ともに近代主義的立場にもとづいており、近代性を付与し得ない歴史的事実は捨象されてきた。大韓帝国は実際には民本主義的立場からの儒教的原理にもとづいた統治構造を形成しようとしたが、そうした統治構想は近代主義的な立場からは十分に評価し得るものではなかった。本研究では、大韓帝国の成立過程を朝鮮社会との相関関係から動的に位置づけ、等身大の大韓帝国像を復元し、その歴史的評価を行う。

研究成果の概要(英文)：What kind of governance structure was the Korean empire that was destroyed by the Japan's Annexation of Korea? That is an important issue not only in Korean modern history, but also in history of Japan-Korea relations. Currently, the historical evaluation made to the Korean empire is based on a modernistic standpoint in both Japan and Korea. And historical facts that can not give modernity were missed. In fact, the Korean empire tried to rule over based on the Confucianism principle from a democratic position, but such a governance plan can not be evaluated sufficiently from a modernistic standpoint. In this study, we will dynamically position the process of establishing the Korean Empire from the correlation with Korean society and make a historical evaluation.

研究分野：歴史学

キーワード：朝鮮史 日朝関係史 東アジア 日本史 儒教

1. 研究開始当初の背景

1897年に成立し、1910年の韓国併合によって滅亡させられた大韓帝国とは、一体どのような統治構造をもつ国家であったのだろうか。現在、大韓帝国に対する歴史的評価は、日韓ともに近代主義的立場にもとづくものであり、いわゆる近代性を付与し得ない歴史的事実は捨象されてきた。大韓帝国は実際には民本主義的立場からの儒教主義的原理にもとづいた統治構造を形成しようとしていたが、そうした統治構想は近代主義的な立場からは十分に評価し得ない。本研究では、大韓帝国の成立過程を朝鮮社会との相関関係から動態的に位置づけ、等身大の大韓帝国像を復元した上で、その歴史的評価を行う。

それでは、大韓帝国の歴史的 성격に関して従来の研究ではどのように評価されてきたのであろうか。他律性史観の克服という立場から民族解放運動史を中心に行われたかつての朝鮮史研究においては、日本においても韓国においても日本の侵略に抗し得なかった点が強調され、積極的に評価されることはなかった。その後、1980年代後半より、大韓帝国皇帝であった高宗あるいは開化派の政治的主体性をすくい上げようとする研究が現れた。政治史的には、高宗の対外・対内政策を「勢力均衡」政策というバランス・オブ・パワーのなかで位置づけた森山茂徳『近代日韓関係史研究』や独立協会の動向を高く評価する韓国の研究がその一例である。経済史的観点からは、大韓帝国統治下において行われた光武量田事業が、日本の植民地支配初期の政策として位置づけられる土地調査事業に先行するものであったことを明らかにしながら、光武改革が高く評価されるようになった。さらに1990年代に入ると、特に日本では月脚達彦による国民国家論的な研究が登場し、その近代的政策および朝鮮社会のナショナリズム形成過程に照明が当てられるようになった。

一方、大韓民国では1990年代以降、日韓「旧条約」の有効性・無効性について日韓の学者間で行われた論争の韓国側の当事者である李泰鎮を中心に大韓帝国に対する再評価が高まり、その近代的性格が強く強調されるようになった。李泰鎮『高宗時代の再照明』の高宗および光武改革に対する高い評価は、「旧条約」無効論とかかわって、日本の侵略以前に大韓帝国によって近代的統治機構が整備されていたことを証明しようとする意図をもつものだったが、その後の韓国における大韓帝国研究の動向を強く規定している。2000年代に入って韓国で大韓帝国の歴史的な性格をめぐる論争が行われたが、同論争の核心的論点は、大韓帝国を近代国家ととらえるのか、それとも専制君主国家と見なすかというものであった。大韓帝国期の政治勢力である独立協会、光武政権（高宗側近グループ）の対日姿勢から、かれらがどれほど自主的な近代化を進展し得たのかをめぐって論争が

行われた。しかし西欧的近代（この論争の場合は「日本的近代」と言うべきだが）を評価軸とする同論争は、その評価軸自体の妥当性を疑わないという問題を抱えていた。こうした研究史的検討から明らかなように、大韓帝国の歴史的展開過程を分析するにあたって西欧的近代化を価値基準とするという発想が依然強いという点こそが問題なのであり、多様な近代像を提示する必要性が叫ばれながら、それを提示する方法論は依然として貧弱である。こうした問題を打開するためにも、モダニズムのドグマに陥ることなく等身大の大韓帝国像を提示する必要があるだろう。

では、どのような視角によってそうした大韓帝国像を抽出することが可能となるのであろうか。これに大きく示唆を与えるのが、民本主義的な儒教原理にもとづいて大韓帝国の国家構想が構築されているとの趙景達の指摘である（「危機に立つ大韓帝国」『岩波講座 東アジア近現代史 2』）。先行する朝鮮王朝が国家原理としていた儒教的な政治構想にもとづいて近代国家システムのなかで国家建設を企図したというその指摘は、近代主義的立場からは単なるアナクロニズムと一蹴されるかもしれない。しかし、歴史的事実を批判的に検証する上で、実際の歴史的展開を単線的なものとして追認するだけでは不十分である。諸種の可能性を復元した上でその展開過程を複線的にとらえ直してみることが必要なのである。したがって、画一的な近代国家成立モデルを相対化するために、儒教国家としての大韓帝国の展開を歴史的に位置づけ、それをもとにオルタナティブとしての理念型を提示することが重要な作業となる。

もちろん、そうした概念的操作の必要性以上に、大韓帝国がそうした儒教的統治理念を掲げることは、一義的には、朝鮮社会との相関関係において規定されていたことを踏まえなければならない。これを端的に示すのが、称帝問題をめぐる一連の動向である。同問題の核心は、国際法上、必ずしも国王の上位概念として皇帝が存在していたわけではなかったにもかかわらず、朝鮮国王高宗が皇帝に即位したところにあるが、これは日清戦争の帰結として東アジアの国際システムである冊封体制が解体する一方で、その規範にもとづいて皇帝を名のするというものであったと同時に、甲午農民戦争を通じて社会に醸成された国王幻想の高まりに対応するものであった。その両者に対応するものとして儒教的規範が機能したと考えられるのである。このように、大韓帝国の政治的動向を、たとえば儀礼の整備といった観点から内政・外交両側面から把握する必要があると同時に、朝鮮の在地社会における秩序回復あるいは社会正義の検証という、広義の政治史において、それがどのように規定されているのかを明らかにする必要がある。大韓帝国は、独裁専制国家である一方で、中央集権的な統治が貫徹

しがたい「強い社会」に規定された「弱い国家」だったという性格を併せ持つ。こうしたアンビバレントな状況を明らかにするためには、①中央政府である大韓帝国の統治構造の形成過程について、儀礼や外交などを含めた政治過程のあり方を検証するとともに、②同時代的な民乱の頻発に象徴される朝鮮社会の動向、そして③国家と社会とを結ぶ結節点としての警察をはじめとする秩序回復装置のあり方を射程に入れる必要がある。この3つの領域を総合的に把握することではじめて大韓帝国の全体像を浮き彫りにすることが可能となる。

2. 研究の目的

本研究が第一に目指すのは、朝鮮における国家と社会の連関性について歴史学的に分析することによって日韓の歴史学界における大韓帝国研究に新たな知見と解釈とを加えようとするところにある。しかしその射程は、そこで得られた知見にもとづいて朝鮮の近代像を類型化した上で他地域の近代化過程との比較史的作業を行うことにより、ウェスタン・インパクトにどのように対応したのかという、非西欧地域が近代において共通に抱えた時代経験が一体どのようなものであり、またどのような意味をもったのかという課題を重層的かつ複眼的に把握しようとするところまで及ぶ。さらに、大韓帝国がその後、日本によって植民地化されたという歴史的事実に即しながら、植民地化過程をも射程に入れて実証作業を行うことで、植民地あるいは被従属地域をめぐる問題群にアプローチする方法論を構築することができる。そしてそれは、近代日本の近代化過程を問い直す作業にもつながるはずである。つまり、従来、非西欧地域の近代像を分析するにあたって、意識的にせよ無意識的にせよ日本の近代像との比較で評価してきた枠組みを多元的なものに再構築するという研究史的意義をもっている。

3. 研究の方法

本研究は、領域を広範囲に設定して研究関心および焦点が散漫になることを避けるために、従来、複数の共同研究を行って問題意識を共有してきた3名の研究者で研究グループを編成し、問題を掘り下げた、より質の高い研究を目指す。3名の研究者は、それぞれ当該期に関する主要研究分野をもちながらも、他の2名と重なり合う研究を進展させているため、本研究の成果は、単なる個別論文の寄せ集めではなく、それぞれの問題関心および検証作業を有機的に結びつけつつ大韓帝国の全体像を提示することを目指す。

研究代表者・研究分担者（以下、研究メンバー）は今まで、大韓帝国期を中心に、朝鮮近現代史の研究を続けてきた。近代日朝関係史を専門とする研究代表者の小川原宏幸は、朝鮮半島を取り巻く国際関係史について研

究を進めてきたが、その際、朝鮮社会を基軸に据えて分析する枠組みを提示した。行論の必要上、大韓帝国の統治構造や外交、儀礼等についても分析を進めてきたが、その際もそうした統治構造が朝鮮社会にどのように規定されているのかを明らかにしてきた。研究分担者の趙景達は、近代朝鮮民衆史の地平を開いてきたが、当該期についても原州民乱の具体的分析など数々の先駆的研究を積み上げながら、朝鮮社会の構造について分析を進めてきた。同じく研究分担者の愼蒼宇は、権力機構と民衆との接点としての警察に注目するとともに、義兵の動向を追う中で、地域社会の正義のあり方について考察を行っている。研究メンバーは、それぞれ①統治構造の展開過程、②在地社会のあり方、③その接点の三つの分野について専門に研究を進めてきたと同時に、それぞれの領域にとどまることなく、相互の関連性を射程に入れて研究を行ってきた。そして従来、いくつかの共同研究等を行う中ですでに問題意識を共有しているという強みがある。研究計画上の役割分担としては、①を小川原、②を趙、③を愼が主に担うこととするが、役割を固定化して狭い領域に閉じこもってしまう弊害を避け、個々の研究領域を拡大していくためにも、緩やかな役割分担の下で相互に関連性をもって研究を進めていく。

大韓帝国の支配構造と朝鮮社会の相関関係に関して個々の研究メンバーがそれぞれ積み上げてきた具体的な事象について、あらためて検証を行ったうえで、もう一度すり合わせを行う。また、韓国における大韓帝国研究の近年の進展は目覚ましく、多くの個別研究が積み上げられてきている状況にかんがみ、最近10年間の韓国における大韓帝国研究の進展状況について認識を共有する。

4. 研究成果

本研究は、1897年に成立した大韓帝国の展開過程について、朝鮮社会および国際関係との相関関係において動的に位置づけた上で、その歴史的評価を行うこと目指してきた。

当該期間における本研究に直接関連する成果としては後述のとおりであるが、研究代表者の小川原は6編の研究論文、2回の国際学会発表、1編の書評、2編の解題を、研究分担者の趙景達は11編の研究論文（うち4編については編著者）、1回の国際学会発表を、同じく愼蒼宇は7編の研究論文、2回の国際学会発表、1編の解題をそれぞれ発表した。特に研究分担者の趙景達は、自身が代表を務める科学研究費補助金の成果をもとに、本研究の成果も反映させて編著書を刊行している。

小川原は、大韓帝国期の朝鮮思想状況の動向を、特に安重根の思想動向についてまとめた上で、韓国現代史を射程に入れて考察を行った。また、近代移行期の日朝関係を国際法的観点から整理する研究を複数発表した。

研究分担者の趙景達は、民族宗教である東学の展開過程を民衆運動的立場からとらえ返すとともに、一方で朝鮮民衆運動史研究のあり方を整理して今後の展望を図り、他方で現在、朝鮮近代史研究においてメインストリームとなっている植民地近代性論のあり方をあらためて批判する研究を複数発表した。さらに、東アジアにおける近代を儒教的政治思想や政治文化の観点から比較史的に考察しようとする意図のもとに、『儒教的政治思想・文化と東アジアの近代』と題した編著書を編み、自身は近代朝鮮における国民国家構想が朝鮮の思惟にどのように規定されているのかを分析した。

同じく愼蒼宇は、帝国主義下において近代移行期を経た朝鮮の経験を、植民地戦争をはじめとした戦争の継続という観点から再構築し、朝鮮社会の変容過程について考察した。また、19世紀末から20世紀の初頭にかけての刑罰と犯罪をめぐる改革とその実態から、同時期の朝鮮の統治・社会秩序の揺らぎについて分析を行った。

当該期間中には3人の共同研究について刊行物という形では発表できなかったが、この間に大韓帝国期の歴史的事象について着実に検討を進めることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

- (1) 小川原宏幸「朝鮮における小国主義の展開試論—安重根の思想的展開と金大中の「太陽政策」との連関性から」『人文学報(京都大学人文科学研究所紀要)』111、2018、査読無、pp. 209-227
- (2) 小川原宏幸「歴史における全体像把握のために—書評『日韓民衆史研究の最前線』」『アジア民衆史研究』22、2017、査読無、pp. 15-24
- (3) 趙景達「災害飢饉時における国家と名望家—報告を聞いて」『歴史評論』806、2017、査読有、pp. 90-96
- (4) 愼蒼宇「植民地期の対馬における朝鮮人」『大原社会問題研究所雑誌』706、2017、査読無、pp. 20-43
- (5) 趙景達「植民地近代の見方—暴力と主体の問題をめぐる」『民衆史研究』91、2016、査読無、pp. 51-58
- (6) 趙景達「安丸史学の検証—逸脱と道徳をめぐる」『現代思想「総特集 安丸良夫—民衆思想とは何か」』臨時増刊号、2016、査読無、pp. 276-291
- (7) 趙景達「混迷する植民地公共性論の行方—植民地近代性論批判再論」『アジア民衆史研究』20、2015、査読無、pp. 84-94
- (8) 趙景達「東学=天道教正史の変遷—教門の正統性と民族運動の主導権」『歴史学研

- 究』938、2015、査読有、pp. 16-26、60
- (9) 趙景達「転換期における民衆の暴力—比較史的視点から見た伊勢暴動」『人民の歴史学』207、2016、査読無、pp. 15-25
- (10) 愼蒼宇「朝鮮から見た日本の戦争観・植民地認識の問題—朝鮮の「150年の非平和」と植民地支配責任論の源流」『人権と生活』41、2015、査読無、pp. 6-14
- (11) 愼蒼宇「【特集】朝鮮人強制連行研究の成果と課題—「戦後70年」の現在から考える—特集にあたって」『大原社会問題研究所雑誌』686、2015、査読無、pp. 1-4
- (12) 趙景達「儒教的民本主義と近代日朝関係—比較史：拙著『近代朝鮮と日本』への論評を踏まえて」『アジア民衆史研究』19、2014、査読無、pp. 58-69
- (13) 愼蒼宇「書評 逆立ちし宙吊りになる正義—「下から」の視点で捉える朝鮮近代史」『アジア民衆史研究』19、2014、査読無、pp. 70-72

[学会発表] (計5件)

- (1) 小川原宏幸「安重根の思想的地平」図們江フォーラム2016(招待講演)(国際学会)2016年10月15日、中華人民共和国延吉大学
- (2) Shin Chang-U「The Easter Rising and Korean Nationalism: Thought, Sentiment and Movements」Japan-Ireland Society、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「日本におけるアイルランド認識と植民地統治」(研究代表者：齋藤英里)(招待講演)(国際学会)2016年12月10日、法政大学
- (3) 小川原宏幸「安重根の思想史的地平」龍谷大学社会科学研究所附属安重根東洋平和研究センター・安重根義士記念館(招待講演)(国際学会)、2015年11月7日、龍谷大学
- (4) 愼蒼宇「KOREA AND THE FIRST WORLD WAR (朝鮮と第一次世界大戦)」The Emergence of <Asia-Pacific> in the International Relations—The First World War and Japan—(国際社会に登場したアジア・太平洋—第一次世界大戦と日本、2014年12月6日、第4回国際関係史学会)
- (5) 趙景達「甲午農民戦争の論理と比較史的位相」東学農民革命120周年記念国際学術大会(国際学会)、2014年10月29日、韓国ソウル国立中央博物館小講堂

[図書] (計11件)

- (1) 趙景達、愼蒼宇 他、有志舎、儒教的政治思想・文化と東アジアの近代、2018、324(1-26、53-80、198-226)
- (2) 趙景達 他、ノモブックス(大韓民国)、東アジアから世界を見ると?、2017、496
- (3) 小川原宏幸、趙景達、愼蒼宇 他、大月書店、隣国の肖像—日朝相互認識の歴史、2016、310(34-49、84-102、135-153)

- (4)小川原宏幸 他、慧眼 (大韓民国)、延禧
専門学校の学問と東アジアの大学、2016、
318 (301-314)
- (5)小川原宏幸 他、法律文化社、平和と安全
保障を考える事典、2016、701 (21、120、
187、189-190、427)
- (6)趙景達 他、有志舎、日韓民衆史研究の最
前線—新しい民衆史を求めて、2015、400
(26-50)
- (7)小川原宏幸、愼蒼宇 他、御茶の水書房、
Q & A 朝鮮人「慰安婦」と植民地支配責
任、2015、182 (70-85)
- (8)小川原宏幸 他、山川出版社、教育が開く
新しい歴史学、2015、229 (206-223)
- (9)趙景達、小川原宏幸、愼蒼宇 他、岩波書
店、薩摩・朝鮮陶工村の四百年、2014、447
(59-93、285-337)
- (10)小川原宏幸 他、景仁文化社 (大韓民国)、
大韓帝国と韓日関係、2014、321 (129-180)
- (11)小川原宏幸 他、岩波書店、岩波講座 日
本歴史 17 卷、2014、313 (3-34)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
同志社大学研究者データベース
<https://kenkyudb.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/index.html>
千葉大学研究者情報データベース
<http://curt.chiba-u.jp/>
法政大学 学術研究 データベース
<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/scripts/websearch/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川原 宏幸 (OGAWARA Hiroyuki)
同志社大学・グローバル地域文化学部・准

教授
研究者番号：10609465

(2) 研究分担者

趙 景達 (CHO Kyeongdal)
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・教
授
研究者番号：70188499

愼 蒼宇 (SHIN Chang-u)
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号：80468222

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()